1 はじめに (§11.1)

(1) 彼女は貧しい。**だが、**彼女は正直だ。(cf. Grice 1961:127)

a. 伴立：彼女は貧しい ∧ 彼女は正直だ

b. 規約的含意[*1]：貧しさと正直さは相反する

- (1a) と(1b) はともに「だが」という言語表現に由来するもので、使用状況に基づく計算により生じるものではない。
- (1a): (1) が**断定** (assert) する内容。**争点** (at-issue) となる内容 (Potts 2005)。**真理条件的意味** (truth-conditional meaning)。
- (1b): (1a) とは独立。真理条件に影響しない。つまり、(1a) が偽でも、必ずしも偽にならない。**使用条件的意味** (use-conditional meaning) (Gutzmann 2015)。
- (1b) の意味の否定＝「だが」の不適切な使用の指摘。

(2) A: 彼女は貧しい。**だが、**彼女は正直だ。

B: 「だが」ってどういうこと？貧しい人ほど正直なものだと思うよ。

2 真理条件的意味と使用条件的意味の区別 (§11.2)

2.1 規約的含意の判別基準 (§11.2.1)

1. 規約的である。
   具体的な言語表現に結びついている。「含意」と呼ばれるものの、語用論でなく意味論的現象。
   → 取り消せない（cf. 会話の含意）
2. 二次的である。
   争点 (at-issue) となる内容に対する根拠、文脈情報、編集上のコメント、評価などを伝える。
3. 独立している。
   争点となる内容の真偽に影響しない・されない。（cf. 前提）
4. 作用域を持たない。
   争点となる内容から独立しているため、否定やモダリティなどの作用域に入ることがない。結果、文中の位置に関わらず、常に最大の作用域（文全体）を取る。
   → 話し手志向 (speaker-oriented)
5. 前提とならない[*2]。
   聞き手に共有される（＝共通基盤 (common ground) にある）必要はない。聞き手はそ

[*1] 「規約的推意」、「規約的含み」とも呼ばれる。前者は伴立 (entailment) を「含意」と呼ぶ場合によく用いられる。

[*2] Potts は「背景化 (backgrounded) されない」と表現。

の内容に挑むことができる（cf. (2)）。

使用条件的意味を表す表現の例

(3) 敬語 (honorifics)、反敬語 (anti-honorifics)

a. A: 今日、佐々木の**野郎**、見ねえな。
B: そうだな。佐々木**先生**どう**なさっ**たんだろう？

b. 寝過ごし**ちまっ**た。(Potts and Kawahara 2004)

(4) 挿入表現 (parentheticals) (Potts 2007)

a. Lance Armstrong*, the cyclist,* battled cancer. （同格表現）
記述的意味：Lance Armstrong battled cancer
規約的含意：Lance Armstrong is a cyclist

b. Max won the election*, which surprised Ali*. （非制限的関係節）
記述的意味：Max won the election
規約的含意：That Max won the election surprised Ali

c. *Thoughtfully,* Jenny picked up her little sister at school. （話者志向の副詞）
記述的意味：Jenny picked up her little sister at school
規約的含意：It was thoughtful of Jenny to pick up her little sister at school

2.2 話者志向の副詞 (§11.2.2)

(5) **正直、**その学生の回答は不誠実でした。

規約的含意の判別基準 (§2.1) の確認

1. 規約的である。
「正直」でなければだめ。「素直に」、「嘘やごまかしなく」は使えない。
2. 二次的である。
「その学生の回答が不誠実だった」が争点 (at-issue) となる内容。「正直」はその内容に対する話し手の態度を追加。
3. 独立している。
   - 仮に「正直」が争点となる内容の一部だとすると、回答が「不誠実」なのに「正直」なものとなってしまう。
   - 当該の学生が実際には不誠実ではなかったとしても、話し手が「正直」述べていることに変わりはない。
4. 作用域を持たない。

(6) a. **正直、**その学生の回答は誠実ではなかった。
b. その学生の回答は、**正直、**誠実ではなかった。

c. その学生の回答は誠実では、**正直**、なかった。
$\rightsquigarrow$ ¬(その学生の回答は誠実である) • これは話し手の正直な意見である
$\not\rightsquigarrow$ その学生の回答は誠実である • ¬(これは話し手の正直な意見である)

5. 前提とならない。
話し手が正直に話しているかどうかはさておき、聞き手は「その学生の回答は誠実である」を真実であるとして受け入れることが可能。

3 日本語の敬語 (§11.3)

素材敬語 (argument honorifics) 文中で言及されている人物に対する敬語。尊敬語、謙譲語。
対者敬語 (addressee honorifics) 発話全体の聞き手が敬うべき人物であるために生じる敬語。丁寧語。

(7) a. 素材敬語
佐々木先生は私にこう**お**話し**になっ**た。
b. 対者敬語
その人は私にこう話し**まし**た。
c. 素材敬語＋対者敬語
佐々木先生は私にこう_____た。
d. 敬語なし
{佐々木先生／その人} は私にこう話した。

- Potts (2005) は、対者敬語が規約的含意を誘発すると分析した。
- 否定文や疑問文でも、敬語の表す敬意は否定されたり、疑問の対象となったりはしない。

(8) a. 雨が降り**ませ**んでした。
b. 雨が降り**まし**たか？

Q. (7a)–(7c) で敬語が表す敬意の意味を否定するにはどうすればよいか？

4 朝鮮語の発話スタイル (§11.4)

- 朝鮮語では文法的に 6 つの丁寧さのレベルが区別される（表 1）。
- これは対者敬語で、その意味は規約的含意である。

5 その他のポライトネスの表示法 (§11.5)

代名詞

- 代名詞が通常の記述的意味に加え、使用条件的意味も表すことがある。

表 1　朝鮮語の平叙文と命令文

	平叙文	命令文
フォーマル	Chayk=ul ilk-ess-*supnita*. book=ACC read-PAST-DECL.FORM 「私は本を読みました。」	Chayk=ul ilk-*usipsio*. book=ACC read-IMP.FORM 「本を読んで下さい。」
丁寧	Chayk=ul ilk-ess-*eyo*. book=ACC read-PAST-DECL.POL 「私は本を読みました。」	Chayk=ul ilk-*useyyo*. book=ACC read-IMP.POL 「本を読んで下さい。」
親密	Chayk=ul ilk-ess-*e*. book=ACC read-PAST-DECL.INT 「私は本を読んだ。」	Chayk=ul ilk-*e*. book=ACC read-IMP.INT 「本を読んで。」
普通	Chayk=ul ilk-ess-*ta*. book=ACC read-PAST-DECL 「私は本を読んだ。」	Chayk=ul ilk-*ela*. book=ACC read-IMP 「本を読め。」

(9)　ヨーロッパの言語の 2 人称単数代名詞：敬称と親称

a.　フランス語：　vous vs. tu

b.　ドイツ語：　Sie vs. du

(10)　マレー語 (野元 2024:13–14)

a.　1 人称単数

saya「私」、aku「あたし、僕、俺」、I（英語由来）、gua（福建語由来）

b.　2 人称

awak「あなた（たち）、君（たち）」（一般的な言い方）、kamu「君（たち）」（少しくだけた言い方）、anda「あなた（がた）」（不特定多数の人間に対して）、engkau/kau/ko「お前、あんた」、you（英語由来）、lu（福建語由来）

ジャワ語のスピーチレベル (speech level) [*3]

- Ngoko（常体）、Ngoko Alus（丁寧な常体）、Kr**a**m**a** Mady**a**（敬語スラング）、Kr**a**m**a**（敬語）、Kr**a**m**a** Alus（最上級敬語体）を語彙で区別する（表 2）。

[*3] 菅原・Rahayu (2017) に基づく。

表 2　ジャワ語のスピーチレベル

レベル	私	～たい	尋ねる	日本語訳
Ngoko	Aku	arep	takon.	「僕は聞きたい。」
Ngoko Alus	Aku	arep	nyuwun priks**a**.	「僕は質問したい。」
Kr**a**m**a** Mady**a**	Kul**a**	ajeng	takèn.	「私は質問したい。」
Kr**a**m**a**	Kul**a**	badhé	takèn.	「私は質問したいです。」
Kr**a**m**a** Alus	Kul**a**	badhé	nyuwun priks**a**.	「お聞きしたいのですが。」

6　ドイツ語の談話小辞 (§11.6)

- **談話小辞** (discourse particle) は、命題や命題に対する聞き手の知識に関する話し手の見方を表す。
- そのような談話小辞の意味も規約的含意／使用条件的意味である。

(11)　a.　Max ist *ja* auf See.
　　b.　Max ist *doch* auf See.
　　c.　Max ist *wohl* auf See.
　　'Max is PRTCL at sea.'

- Zimmermann (2011:2013) からの引用
  - (11) の文は、命題内容の点で違いはなく、すべて同じ真理条件を持つ。[...] しかし、小辞 (ja、doch、wohl) の選択が異なるため、適切性条件 (felicity condition) に違いが生じる。すなわち、各文は異なる文脈において適切になる。
  - (11a) は、聞き手がマックスが海にいるということに気付いていると話し手が想定していることを表す。
  - (11b) は、聞き手が発話時において、このことに気付いていないと話し手が想定していることを伝える。
  - (11c) は、表現された命題の真偽についての話し手の不確かさの度合いを表す。
- ja、doch、wohl は、日本語の終助詞「ね」、「よ」、「かな」にほぼ相当。

(12)　a.　マックスが海にいる**ね**。
　　b.　マックスが海にいる**よ**。
　　c.　マックスが海にいる**かな**。

Q1.　Zimmermann (2011) の他の例でも日本語との対応が成り立つか検討しなさい。

Q2.　談話小辞の使い間違いは、命題の真偽には影響しないが、発話を不適切にする。このことをドイツ語と日本語の例で確かめなさい。

(13) ［兄が弟に］
Morgen wird Mama *ja* siebzig.
tomorrow turns mum JA seventy
'Mum turns 70 tomorrow, y'know.'

(14) Q: 誰が勝ったの？
A: #Peter hat *ja* gewonnen.
Peter has JA won
'Peter has won, y'know.'

(15) A: あれはウサギだ。
B: #Nein, das ist *ja* ein Hase.
no that is JA a 野ウサギ
'No, it's a hare, y'know.'

(16) A: メアリーはクラブに行った。
B: Nein, Maria ist *doch* zu Hause.
no Mary is DOCH at house
'But Mary is at home.'

(17) A: メアリーは家にいる。
B: #Nein, Maria ist *doch* zu Hause.
no Mary is DOCH at house

(18) A: ちゃんと知ってる。
#Hein ist *wohl* auf See.
Hein is WOHL at sea

(19) A: ハインが見当たらない。
Er ist *wohl* auf See.
he is WOHL at sea
'He may be at sea.'

参考文献

Grice, H. Paul. 1961. The causal theory of perception. *Arisotelian Society Supplement* 35:121–152. URL `http://www.jstor.org/stable/4106682`.

Gutzmann, Daniel. 2015. *Use-conditional meaning: Studies in multidimensional semantics*. Number 6 in Oxford Studies in Semantics and Pragmatics. Oxford: Oxford University Press.

Potts, Christopher. 2005. *The Logic of Conventional Implicatures*. Oxford: Oxford University Press.

Potts, Christopher. 2007. Into the conventional-implicature dimension. *Philosophy Compass* 4:665–679.

Potts, Christopher, and Shigeto Kawahara. 2004. The performative content of Japanese honorifics. In *Proceedings of the 14th Conference on Semantics and Linguistic Theory*, ed. Kazuha Watanabe and Robert B. Young, 235=254. Ithaca, NY: CLC Publications.

Zimmermann, Malte. 2011. Discourse particles. In *Semantics*, ed. Paul Portner, Claudia Maienborn, and Klaus von Heusinger, number 33.2 in Handbücher zur Sprach- und Kommunikationswissenschaft, 2011–2038. Berlin: Mouton de Gruyter.

菅原由美, Yosephin Apriastuti Rahayu. 2017. 『ジャワ語の基礎』 東京外国語大学. URL `http://www.aa.tufs.ac.jp/documents/training/ilc/textbooks/2017Javanese1.pdf`, 平成 29 年度言語研修ジャワ語初級テキスト.

野元裕樹. 2024. 『マレー語の教科書：詳解文法』 Next Publishing Authors Press. 改訂版.